

[02_02]情報処理教育広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6766149>

出版情報：情報処理教育広報. 2 (2), 1980-02. Educational Center For Information Processing,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



巻 頭 言

林 健 志*

九州大学教養部では、昭和 52 年度に自然科学系の一般教育科目として情報科学が新設された。全国的に見ても情報科学関係の学科目が教養部にある大学はまだ数も少なく、また教科の内容に関しても各大学まちまちの様である。特に電子計算機との関連性に対する重点の置き方は千差万別のように思われる。しかし情報に関する科学が人類の興味の対象に浮び上がって来たのは、ひとえに情報処理を行なう機械としての電子計算機の出現に負うのではないだろうか。電子計算機の発明までは情報処理の能力というのは人間の専有物であったから、情報を変換する機械としての電子計算機が人間社会の在り様を変えていくのも当然であろう。

この様な観点から情報科学を捕えているので、講義の一環として、電子計算機の原理を教え、プログラミング演習を学生に課している。教養部において計算機教育を行なうことに関する是非については、色々議論がある様である。しかし今日の様な情報化社会では、特に進学後情報処理教育を受ける機会の無い学生に対して、その場を与えることは重要であると考えている。機器的には情報処理教育センターの六本松地区にある端局をリモート・バッチ処理方式で利用している。入力マークカードで行ない出力はライン・プリンタによっている。センターの御尽力により、発足時に比して、現在は機器的にもかなり増強されたが、それでも色々問題はある。例えば、100 名以上の学生を相手に演習を行なうのであるが、端局室は10名位が入る広さしかなく大変な混雑である。また、ソフトウェアに関しても、リモート・バッチ・システムの製作者が実際のシステムを使いこなした経験に基づいて設計・製作してくれるともう少し使い勝手の良いものになるのではないかとと思われる。

この様な現況を踏えた上で、将来の展望を述べてみたい。教養部においても、箱崎地区同様、時代のすう勢であるタイムシェアリング・システムを本格的に導入して計算機教育を充実させたい。また情報科学以外の学科目においてもセンターの機器が実験、演習用に手軽に利用出来る様になることが望ましいと思っている。諸賢の御協力を切にお願いしたい。

*教養部助教授（センター運営委員、端局運用責任者）